２１世紀の日本のかたち（３）
--- 文明のおしくらまんじゅうと日本文明 ---

戸沼幸市
（財団法人日本開発構想研究所理事長）

１．地球人口正負のダイナミズム

地球人口は有史以来、一貫して増え続けています。

国連は 2001 年、61.3 億の人口が 68.3 億（2010）、81.9 億（2030）、90.6 億（2050）となり、21 世紀の後半には 100 億人を超えると予想しています。

但し、地球温暖化などの影響もあり、100 億の手前で地球人口が減少に転ずるという説もあり、ようやく安定期に入るのかもしれません。事実、ヨーロッパや日本は現在、人口減に転じております。

とはいえ、21 世紀の前半の地球人口は 60、70、80、90 億人と大きく人口増が続くのは確かなことでしょう。この人口増加は、アジア、アフリカが主要地域であり、アフリカは 2000 年の８億が 19 億と、50 年で倍増、2050 年、中国地域は 14.7 億、インド地域、19.3 億、東南アジア 7.5 億と推計されております。先進国ではアメリカが４億と人口増を続けるのが目につきます。

この事態の中でユーラシア大陸の両端地域、ヨーロッパと日本が突如、劇的に人口減少時代に入りました。日本としてもこの事態をどのように評価し、未来図を画くかが緊急の課題となりました。

２．文明のおしくらまんじゅう

現在、地球には気候、地理、地形に特徴づけられた 200 ほどの国家があり、これらがそれぞれの人口（人間）の生存と生活を支える枠組みとなっています。

その下敷きとなっているのが文明圏というより大きな居住領域です。一定の自然環境をベースに、人種、宗教、統治のシステムによって文明の領域が形作られ、地球上はいくつかの文明圏に分けることができます。

最近では、S. ハンチントンが、文明の衝突 ― The Clash of Civilizations and The Remaking of World Order の中で、次の９つを文明圏としています。①西欧、②ラテンアメリカ、③アフリカ、④イスラム、⑤中華、⑥ヒンドゥ、⑦ロシア正教会、⑧仏教、⑨日本です。（図１）

この分類では、現在の国家の枠祖みと一致しているのは日本のみであり、その独自性（アイデンティティ）が際立っているということでしょう。

この区分を地球における気候に基づく可住地、地政学的区域に重ねて地図に示すと、

まさにいくつもの国を包む文明圏が“おしくらまんじゅう”をしている様相を示します。（図２、３）

人類の歴史は民族をベースとした居住領域の取り合い、確定の歴史であるともいえます。

文明のおしくらまんじゅうは、衝突や緩和、融合を重ねつつ、グローバリゼーション、地球人口動態のダイナミズムの中でより大きな文明圏への統合、最終的にはより安定した地球文明圏への統合へと向かうにちがいありません。

ハンチントン氏が９つの文明圏の一つにあえて日本文明を取り上げたことには、東洋をベースにしながら短期間に西欧文明を取り入れ、世界有数の経済大国になったことなど、アジアの一角において特有の振る舞いをしていることに注目したことによりましょう。

逆にいえば、日本が東洋と西洋の接点として、アジアにおけるこれからの多方面な役割が期待されているということでしょう。特に、東アジア文明圏の中での人、モノ、カネ、情報などの交流拠点としてのウェイトを増すことが求められています。

３．日本文明の位置どり―『多民族共住の１億人国家モデル』

このような状態の中で、人間の新しい居住領域として、日本を含むアジア、なかんずく東アジアでは、人、モノ、情報、経済の交流がより活発化している東アジア居住圏といったものが姿を現しつつあります。

日本、台湾、韓国、（北朝鮮）、中国は、すでに活発な交流を重ねていますが、加えて ASEAN（東南アジア諸国連合：タイ、カンボジア、ミャンマー、ラオス、インドネシア、ベトナム、フィリピン、マレーシア、シンガポール、ブルネイ）が加わった東アジア地域は、20 億人を超える地球における有力な居住領域として、21 世紀、新しい秩序を持った平和で安定した生活圏となることが期待されます。

このような動きの中で、この領域の人口動態のダイナミズムの必然として、国境を越えた人の交流移動、移住も 50 年後には相当進むにちがいありません。

この想定図の中で日本の果たすべき役割は、平和の上に築いた技術、蓄積した情報、制度、経済システム、人材をこの地域のために開放することです。この地域が全体として抱えている貧困や環境といったものに対しても積極的に関わって何らかの役に立つべき時です。

21 世紀の日本の国土、国家計画といったものも縮み志向に陥って一国の中に閉じこめるものではなくて、大きな居住圏の一員として振る舞うことなしには成り立たないと思います。多様な生態系、多様な歴史と文化を持つ東アジア共同体の生き生きとした構築の中に、持続的な日本のこれからの生き方、日本のかたちがあると考えます。

20 億人を超える人口成長期の東アジア生活圏と不可分にある日本地域の人間居住、国際化する状況の中で、50 年後、人口の１割は外国人という設定があってもよいのではないか。現在、日本における外国人登録者は 200 万人を超えており、50 年後 500 万人、1,000 万人を想定することは不自然なことではありません。多民族が共住（共生）する１億人国家の日本を踊り場的にしろ、

想定してみることは、21 世紀の日本のかたちを考える上で意味のあることでしょう。

21 世紀地球の諸文明のダイナミックな交差の中で人口減少社会に入った独自な文明圏としての日本の在り様が今問われています。

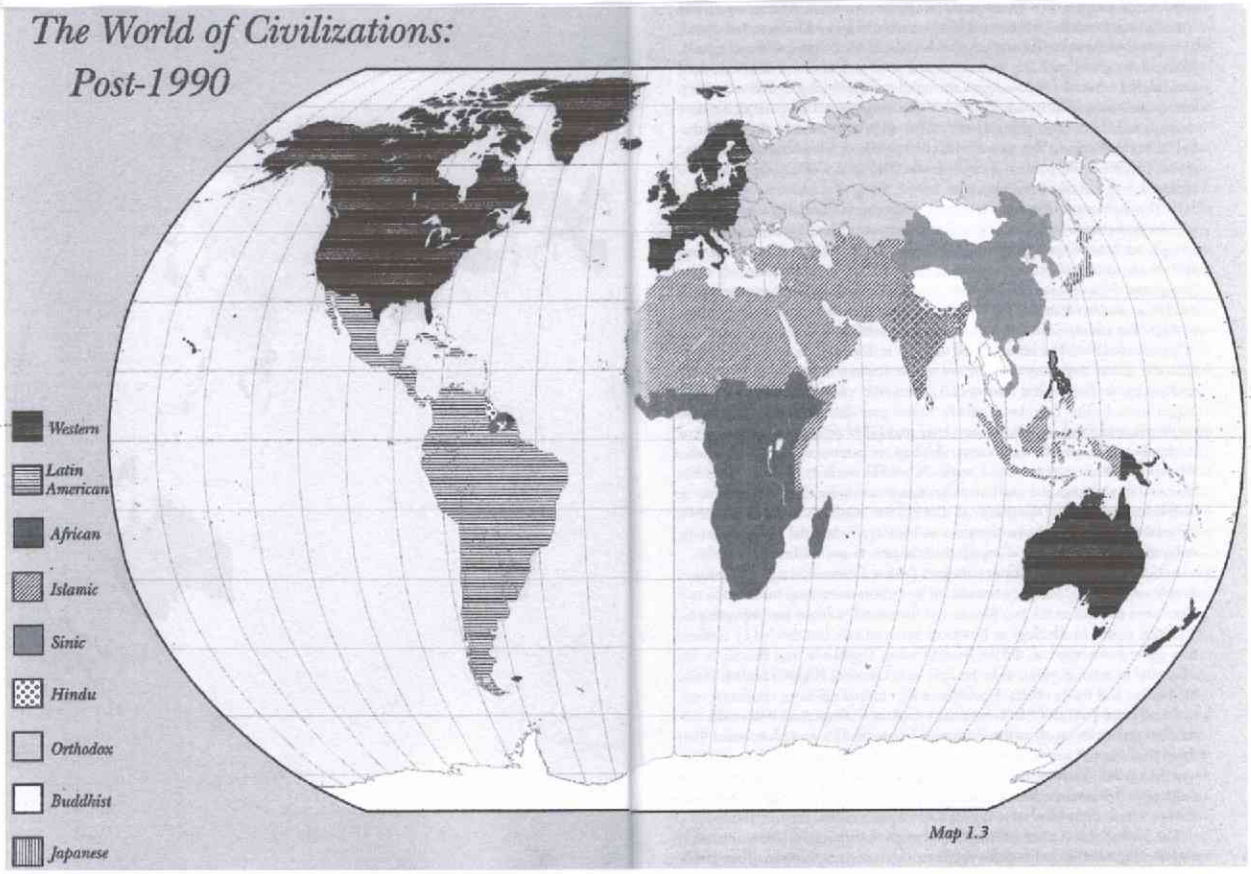

図１　世界の文明圏（1990～）　出典：「The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order」Samuel P. Huntington, Simon & Schuster,1996

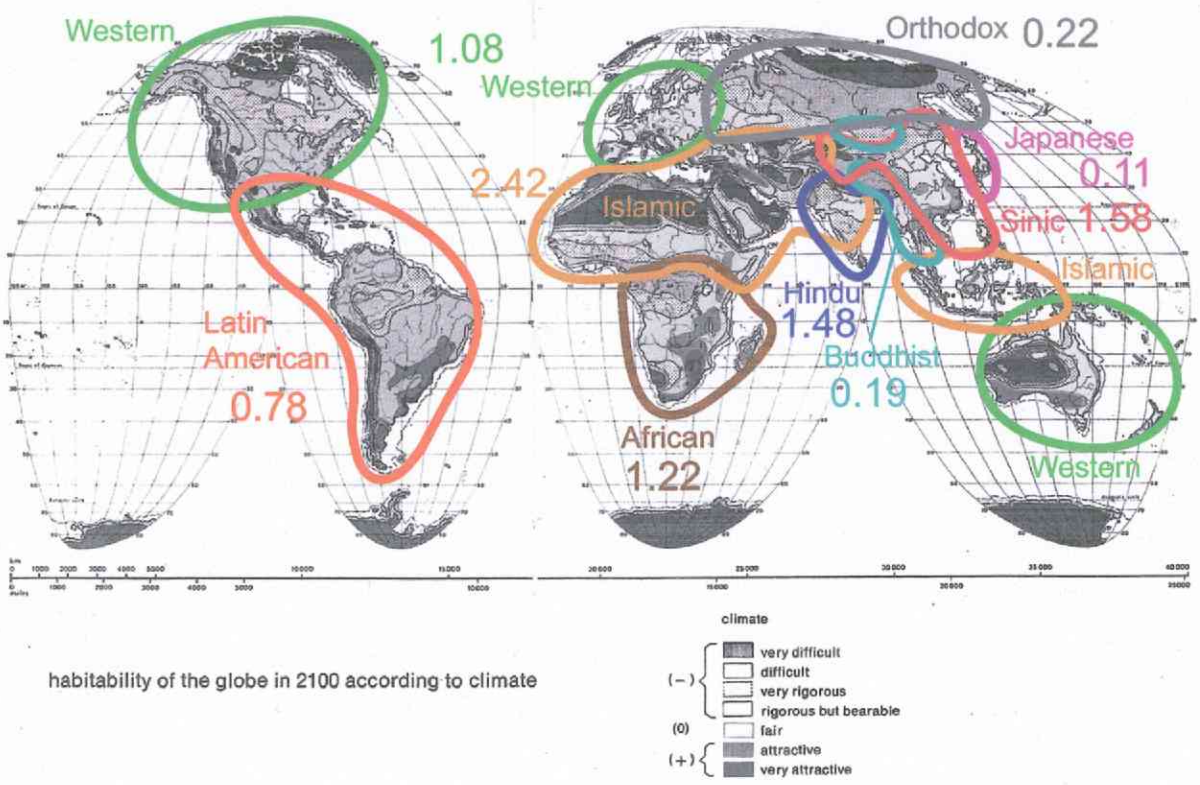

図２　文明のおしくらまんじゅう -1　S.P.Huntington による文明圏と、気候にもとづく 2100 年の世界の可住地
（図中の数値は 2050 年におけるそれぞれの予測人口（単位：10 億人））

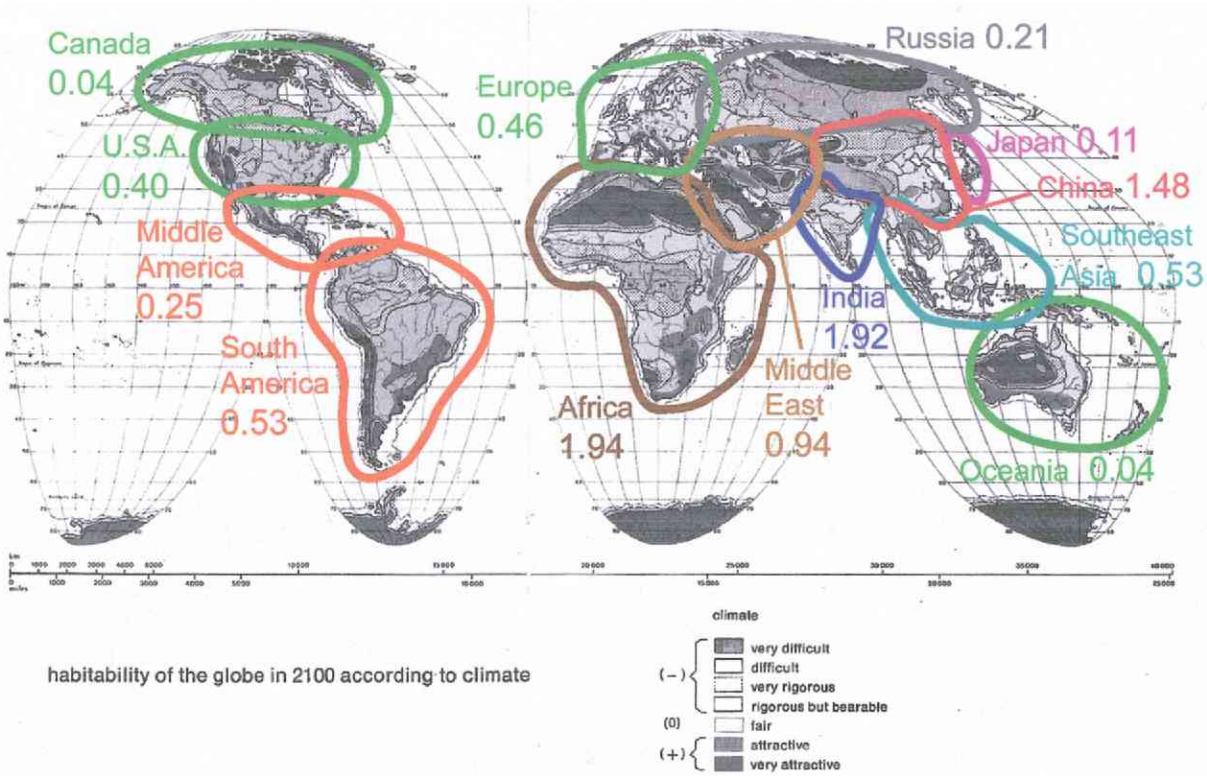

図３　文明のおしくらまんじゅう -2　地政学的な区分にもとづく文明圏
(図中の数値は 2050 年におけるそれぞれの予測人口（単位：10 億人))

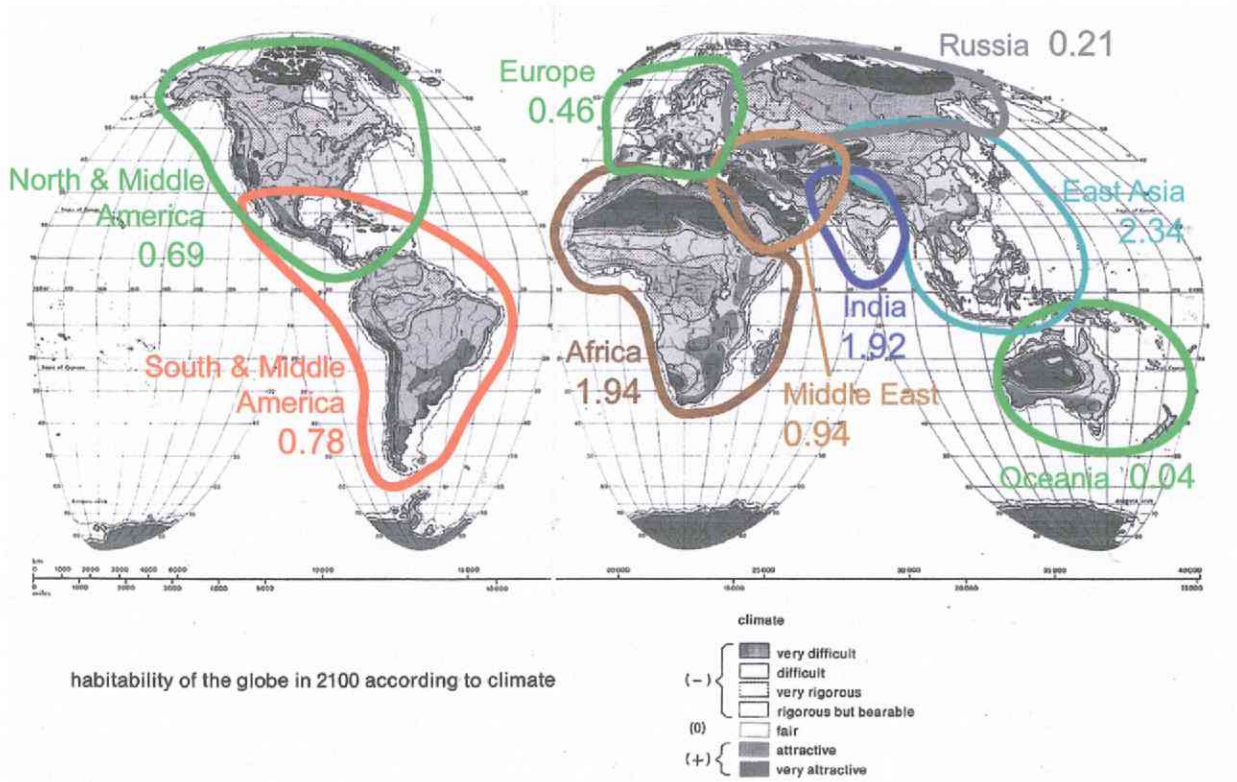

図４　文明のおしくらまんじゅう -3　より大きな文明圏の動き
(図中の数値は 2050 年におけるそれぞれの予測人口（単位：10 億人))